

同窓会

ニュース・レター

第9号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2010年3月20日発行



改修を終えた文学部・文学研究科本館



歓談する河上会長、江川研究科長、小林さん

目次

鼎談／文学部本館改修を終えて	P 2
定年退職される先生方からのメッセージ	P 4
玉井 暉先生(英米文学)、蜂矢 真郷先生(国語学)	
根岸 一美先生(音楽学)、天野 文雄先生(演劇学)	
平成21年度課程博士・修士・卒業論文題目	P 6
研究室今昔	P10
臨床哲学研究室、人文地理学研究室	
お知らせ	P11

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

鼎談

文学部本館改修を終えて

三年がかりの文学部本館改修工事が、この三月で完了します。半世紀ぶりの大工事で、私たちの学び舎はまさに面目一新。

この節目を記念して、河上誓作同窓会長、江川温研究科長、長く合同研究室にお勤めになった小林信子さんに、文学部・文学研究科の来し方行く末について、語っていただきました。

(構成／三谷研爾)

まず、今回の本館改修工事の経緯からお願いいたします。

江川 今回の工事は、大学の建物の老朽化・狭隘化対策、とりわけ耐震補強を重視しておこなわれました。まず07年度に建物外壁に耐震フレームを付けました。このときは、建物のなかで普段どおり授業や事務を続けながら工事をするというかなり乱暴なことをやりました。騒音と粉塵で一時大変なことになります。豊中労働基準監督署から注意を受けました。それで、建物内部の耐震壁工事は遅らせ、内装工事と一緒にやることになったわけです。それも、08年度から三年計画で改修するところ、途中から景気対策で、09年度のうちに完工せよということになりました。そのため会計の高見係長が毎晩遅くまで書類を作り、かなり無理もして研究室の一時移転の計画をたてました。豊中キャンパスでは本の仮置き場がないということで、トラック隊で吹田の病院の地下に書物を運ぶということもやりました。

そうすると、この三月で工事はすべて終了なのです。

江川 そうです。今年度前半で北ウイング(浪高庭園に面した部分)が仕上がり、現在は南ウイングにかかっています。この部分は法学部・経済学部の部屋が多いのですが、文学研究科関係では考古学研究室といくつかの演習室が入ります。

皆さまもこの建物のかかわりをお聞かせください。

小林 私は三年生のときには口号館で過ごし、四年生になる前に、二の字型に建てられた新しい建物に引越しました。専門課程の二年の間に、口号館と今の文学部本館を一年ずつ経験したことになります。

卒業後はそのまま、本館一階の合同研究室に勤務することになりました。合同研究室は最初、玄関を入りましてから右側にあったのです。やがて、廊下をへたてて反対側に書庫があった時期があり、そのあと玄関左側つまり今の研究推進室の場所に移りました。文学部はまだ口号館にいました。ときには、哲学科・文学科・史学科の学科ごとに合同研究室があり、それぞれ第一・第二・第三と付けて呼ばれておりました。助手の方も皆さんその部屋におられ、本も入ってたんですね。学生もそこで勉強していました。私が教養課程から三年生に上がりましたときは、そういう状態だったのです。

江川 講座ごとの研究スペースも、学生の自習スペースもなかったのです。

小林 もちろん、ありませんでした。助手も学生も合同研究室で一緒に勉強し、図書も基本的なものはそこにありました。それが本館に移ってきました。第一・第二・第三という呼び名はやめになったのですが、哲学科だけは廊下の右側にスペースをとり、哲学合同研究室といっておりました。各講座の助手室ができたのは、このときです。ただ心理学や教育学は、もともとからC棟にあつてそのまま。合同研究室には哲学の分もあわせて三名の係員がおり、私は卒業後そのひとりとして入りしました。

河上 私が合同研究室を使うようになったのは、62年くらいからですね。たくさんの方がおられる合同研究室は研究のメッカみたいなもので、雰囲気が好きでよく行きました。中国哲学の先輩など、いろんな領域の人がそこに立ち寄られて、勉強しておられる。自分とはまったく違う先輩たちがそこにきておられ、学年が上がるとああいう風に勉強するの、と強く思いました。本がたたく置かれていて、辞書などを繰っては雰囲気味わう。ゆつたりとした時間が流れていたということです。

私が学部を卒業したのが65年、それから大学院をへて助手になりました。当時すでに英文学研究室と英語学研究室があり、学生時代には助手室に出入りして、じっくり話をすることもできました。先生がたの部屋にもよく行き、いろいろ話をし、部屋を出るときには勉強する意欲が湧いてきました。本当に恵まれた時期だったと思います。その後、九州大学に転任して十四年間を過ごし、83年に戻ってきました。

江川 私が助手として西洋史研究室に着任したのは、79年春です。そのときにはすでに、各研究室に図書が置かれ、助手のスペースも学生のスペースも十分とは言えないものの、ちゃんと確保されていました。もともと、研究室はおしやべりする人もいれば、本を読みたい人もいるわけで、静かに勉強したい人は合同研究室へ行って勉強し、小林さんのお世話になるということだったと思います。助手の居場所も研究室によつて違って、西洋史ではデスクが共有スペースの片隅にある状態でした。ただ、私が学生として暮らした京都大学に比べれば、各研究室の距離が近かったような気は致します。

私はその後、教養部に移った時期もありましたけれど、ずっと豊中キャンパスにいて、文学部の変化を見てきました。いちばん大きかったのは、00年に文法経の三学部で要求していた新しい建物、つまり今は法経大学院研究棟と呼ばれている建物、つまり今ときです。この新棟をすべて法学部と経済学部で使っていたことの結果、その分のスペースを本館内で譲り受けました。そのおかげで、文学部はいわゆる西ウイング(美学棟と向い合わせの部分)にかなりの部屋を確保し、さらに南ウイングの一部も使えるようになったのです。各研究室にも相当にゆとり

りができ、本館全体が文学部中心の建物に変わったわけです。

つぎの変化は04年、阪大が独立行政法人化したときです。このときに教育支援、評価広報、研究推進、国際連携の四室を設置致しました。合同研究室が研究推進室となり、書庫があった場所に教育支援室を新設しました。これは学生のためのスペースですから、各研究室のスペース拡大とあわせ、学生には少しづつゆとりができてきたわけです。そのかわり本館では、教室や演習室が減りました。

本館ができた当時の各研究室の様子はいかがでしたか。

小林 最初はね、教授室・助教室・助手室しかなかったのです。研究室ごとの図書スペースはなし。

河上 助手室は、学生の多いところにはあったような気がします。英語学には、たしかにありました。

江川 各研究室が本館に移ってきた最初の段階で、どれくらいのスペースを占有したかということによって、助手室を確保できたところとできなかったところがあつたようです。

河上 昔は助手というと、お茶くみから何からはとんどやっていたからね。それが、80年代あたりからでしょうか、しかるべきスペースで独立した研究をする職種であるという声が高まりました。でもそれは、研究室によつてだいぶ違って、学生の面



定年退職される先生方からの

メッセージ

◆さまざまなお出合い

英米文学 玉井 暉

英文学講座助教授として着任したのは一九八三年（昭和五十八年）四月のことだから、二十七年の長きにわたって文学部・文学研究科に在職していたことになる。それ以前でも、学部・大学院の学生として六年、助手として三年余り、文学部のお世話になっていたのだから、計三十六年余りにわたって文学部・文学研究科に関わっていたのだ。でも、振り返ってみると、月並みな表現だが、長いようで短い阪大文学部時代であった。これも良き恩師、良き同僚、良き友人、そして良き学生・院生に恵まれて、愉しく充実した年月を過ごすことができたからであろう。これらの方々へ深い感謝を捧げたい。

私の学生時代の文学部は、英文科の基準数が十五名であった。男子学生は小生の一名のみ。隣の仏文科も男子は一名。後にフラン



ス文学講座教授となられた柏木隆雄さんである。互いに助け合わねばならないという共通の認識が育まれたのはこの頃かもしれない。一年先輩にはこれまた後にドイツ文学講座教授となられた林正則さんがいた。お二人には生涯にわたってお世話になるとは、このとき思いも及ばなかった。

卒論も修論もオスカー・ワイルドであった。英文科の助教授・教授としても講義・演習でイギリス世紀末文学を扱うことが多かったから、生涯かけて学生時代に出会った文学を恋々と語ってきたことになる。余り進歩のなかった研究生生活と言えりかもしれないが、研究や教育においてはさまざまなお出合いが大きな意味をもつ場合が少なくない。思えば、私の出合いも幸いであつたのではあるまいか。



玉井 暉
和歌山県生まれ。大阪大学文学部卒。文学研究科修士課程修了。文学博士（大阪大学）。専門は英文学・文学環境論。主著・訳書に、「イギリス世紀末文学におけるテクニク」と言語—ペイターとワイルド」、ヒリス・ミラー「小説と反復」、アッカーマン「評伝J. G. フレイザー」など。

◆「浪速の友に」

国語学 蜂矢 真郷

昨年度初め、東洋史学の新しい助教にS氏が赴任した時、日本文学の助教のNさんが、私の教えた旧姓Tさんの結婚相手だと教えてくれた。それがきっかけで、その年の秋に、何年ぶりになるかTさんに会った。その時、多くのことを話したが、そのいくつかについて、図書館勤務の彼女は「職業病」だと言いつついろいろ調べてくれた。その一つが浪高の歌のことであった。

阪大の豊中学舎が旧浪高の場所であることは、イ号館が旧浪高の校舎だと教えてくれた人がいて、赴任前から知っていた。その先輩（故人）は旧制の大学の最後の卒業であったが、浪高出身であると後に知った。

阪大の直接の基は浪高と大高である。経緯は省略するが大高の歌を知っていて、現にいる場所にあった浪高の歌を知らないことは、赴任当時全く気にしていなかったが、なぜか今頃になって少し気になるようになり、そんなこともTさんに話したのであった。

彼女は、浪高「校歌」（土井晩翠作詞、山田耕筰作曲）と「浪速の友に」（辻村鑑作詞、弘田龍太郎作曲）とを届けてくれた。「浪速の友に」の方が愛唱されることや、浪高庭園の西北の隅近くにその一番「麥生の床に百鳥の聲は平和を名のれども／ウエルダンの野に夏草や／兵どもの夢の跡／血にコクリコの花咲けば／文化の誇今いづこ」を書いた碑があることも教えて貰った。

その二つの楽譜をNさんに見せると、思いがけないことに、Nさんは、「血にコクリコの花咲けば」の部分を知っているといい、後日、浪高から京大経済学部を卒業し、京大助教を経て、阪大名誉教授、ロンドン大学名誉教授である森嶋通夫氏の「血にコクリコの花咲けば」ある人生の記録」[2007・3 朝日文庫]を貸してくれた。

森嶋氏の本によると、浪高の教育はよいものではなかったようであるが、作詞者の辻村先生（「校長と教育方針について意見が対立し、不本意にも退職させられた人である。」）「先生は校長との戦いにやぶれたが、当時では珍しい学校紛争にまで高めて先生を支持してくれた生徒たちに、感謝の心をこめてその歌を贈ったのである。」とある）や、森嶋氏を含む反骨的な卒業生が多かったところであったというのはおもしろい話であった。

「浪速の友に」は校歌も未だ歌うことができないうが、今の阪大がどうであるかはともかく、そうした土地にすることがどこかおもしろく、またそういうことを知るに至った人の繋がりを喜びたいと思う。



蜂矢 真郷
京都大学文学部卒業、同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。親和女子大学専任講師、同助教授、帝塚山学院大学助教授、奈良女子大学助教授、大阪大学助教授、同教授を経て現職。萬葉学会代表、国語学集史研究会代表幹事、国語文字史研究会代表



◆よき出会いのうちに

音楽学 根岸 一美

私は一九九八年に音楽学担当の教授として着任しました。主に十九世紀のオーストリアの作曲家アントン・ブルックナーについての研究に取り組んでいたのですが、この着任の年に、彼の交響曲を日本で初めて指揮したヨゼフ・ラスカという、やはりオーストリア出身の音楽家が、日本滞在中(一九三三―一九三五年)に書いた数々の作品の楽譜に出会い、それらを実際の音楽として蘇らせることに力を注いできました。もちろん演奏家の皆さんや研究室内外の学生諸君の協力を得てのことです。二十世紀COEプログラムの一環としてラスカのバレエ・パントマイム《父の愛》を他大学の協力を得て世界初演できたことも、今や良き思い出となっています。



根岸 一美
1975年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。大阪音楽大学専任講師、大阪教育大学助教授、同教授を歴任。共編著：『ブルックナー／マーラー事典』（東京書籍）、『音楽学を学ぶ人のために』（世界思想社）、著書：『作曲家〇人と作品 ブルックナー』（音楽之友社）。

講義は主として文十三教室で行い、ピアノで音楽のサンバルを示し、CDもふんだんにかけながら、ブルックナーやラスカだけでなく、西洋音楽史上のさまざまな作品を取り上げて、ずいぶん好きなことを語らせていただきました。とはいえ、学生や院生の皆さんが卒業論文や修士・博士論文でテーマに取り上げたのは、むしろクラシック音楽以外のものが圧倒的に多く、いろいろと面白い経験を得るとともに、奮闘の日々ともなりました。

この四月からは別の大学にてもう少し現役を続けることになり、退職の気分はいささか遠のいています。文学部および文学研究科の皆様のおますますのご活躍を少し離れた処よりお祈りしています。

◆新同窓会員の弁

演劇学 天野 文雄

文学部への着任は昭和六十二年の十月だから、月並みな表現ながら、早いもので、この三月で二十二年と六カ月になる。着任したときは、定年までの二十二年あまりという時間は、筆者にはほとんど無限のように思われたが(年齢も四十歳で最年少に近かった)、時は着実に、そして容赦なく経過し、筆者も馬齢を重ねて、気がつけばすでに還暦を三つも越えている。このような節目に際会して思うのは、やはりこれまで文学部と文学研究科で過ごした二十二年あまりの歳月とその重さ、そしてそこから受けた多大の研究上の恩恵である。これはこのたび自身の業績目録を作成して思ったことだが、いまからみると、着任当時の筆者の研究業績はとりわけ傑出しているというほどではなく、少し誇張して



いえば、これでよく大阪大学の助教授(当時は准教授ではなかった)になることができたものだ、という感慨があった。しかし、これも作成した業績目録をみていて気がついたのだが、着任して数年すると、自身の著作の質が格段と上がっていることが明瞭なのであった。原因はいうまでもなく、文学部と文学研究科の「環境」で、こうして、この二十二年あまり、筆者は文学部と文学研究科から多大の恩恵を受け続けてきたのである。

文学研究科の教員は、大阪大学の出身でなくても、文学研究科の同窓会の会員になれるという。文学部と文学研究科に育てられた筆者の場合は、なおさらその資格があるのではないかと思うのだが、どうであろうか。



天野 文雄
1946年、東京生まれ。国学院大学大学院修了。文学部着任は82年。著書に、『翁猿楽研究』（和泉書院）、『能に憑かれた権力者』（講談社選書）、『現代能楽講義』『能苑遺通（上中下）』（大阪大学出版会）、『世阿弥がいた場所』（ベリかん社）がある。

臨床哲学

私が大学院博士前期課程哲学哲学史専攻・倫理学研究室で学び始めたのは、一九九三年、大学院が大きく様変わりする前夜のことだった。先生方は、塚寄智教授、霜田求助手、そして前年に着任されたばかりの鷺田清一助教授。その頃はまだ学部から院まで学年につき○人か一人程度で、全学年が出席する論文作成演習も教員あわせて一〇人以内、四名ほどの文献演習では毎回必ず当るといふ、今から考えれば贅沢な環境だった。しかし変化の波はすぐ訪れる。一九九四年の旧教養部解体に伴い中岡成文助教授を新たに迎え、塚寄教授の退官、鷺田・中岡両先生の教授昇任、そして大学院重点化を経て、一九九八年に、学部は倫理学のまま、大学院が哲学講座専門分野「臨床哲学」に衣替えとなった。

新たな装いのもと、これまでの哲学・倫理学研究にはなかつた社会的実践やフィールドワークをも課題に取り入れるという文字通り実験が始まった。社会人院生も参加しやすい金曜の六限に中核



2008年10月「中之島哲学コレージュ」での臨床哲学セミナー

新しい装いのもと、これまでの哲学・倫理学研究にはなかつた社会的実践やフィールドワークをも課題に取り入れるという文字通り実験が始まった。社会人院生も参加しやすい金曜の六限に中核



開講間もない頃の金曜6限の授業

となる授業が開講、院生・教員とゲストみんなど私たちが何をなすべきかについて毎晩遅くまで意見が交わされた。同じ光景は十二年たった現

(本間直樹)

研究室今昔

人文地理学



2000年11月22日 石見銀山調査実習(島根県大田市大森町)

大阪大学では、早くも一九五〇年代に地理学の専任教員が「講座外」として配置されていたが、後に人文地理学関連部門は比較文化講座内に位置づけられた。二〇〇五―二〇〇九年度現在まで、助手・助教は不在である。当教室は二〇〇〇年四月からの大学院重点化により、現在は文学研究科文化形態論専攻に属するに至っている。二〇〇一年度からは、文法経本館に独立した研究室と教員室、さらに日本史学教室と共同の資料室を得て、随時設備の充実が図られるなど、着実に発展し続けている。(堤研二)

故矢守彦教授・高橋正助教授後に教授)の二人が人文地理学関係の研究・教育に携わり、この講座は日本における城下町研究、古地図・絵図研究の中心となった。教養部には、地図学史を専門とする故海野(うんの)一隆教授が在籍していた。その後、海野教授の後任の金坂清則教授(歴史地理学、都市史、イザベラ・バード論)が一九九四年に教養部の改組に伴い転任して来た(一九九六年三月に京都大学大学院人間・環境学研究所へ転任、翌年度まで併任)。このことよって当教室は、実験講座として充実し、一九九五年に講座として独立した。つづく一九九七年四月に戦国城下町研究者の小林健太郎教授が滋賀大学教育学部より着任したが、同年七月に急逝された為、数ヶ月間専任



2008年2月2日 卒業論文・修士論文発表会(郷土かるたに関する卒業論文)

第二回 大阪大学文学部同窓会講座のご案内

昨年より始まった同窓会講座の二回目です。今回は、私たちが学んだ阪大待兼山キャンパスの歴史をたどる現地見学会です。待兼山には、戦前、旧制浪速高等学校や大阪帝国大学附属医院石橋分院の建物が建てられ、その一部は今も利用されています。旧浪高高等科本館は現在のイ号館、旧石橋分院本館は現在の阪大総合学術博物館待兼山修学館（もと医療技術短期大学部本館）です。キャンパス内を歩くと、キャンパス八十年余の歴史をうかがわせるものがたくさん残っています。かつて学んだ待兼山の地を懐かしく思い出しながら、阪大の歴史を実感したいと思います。ふるついでに参加下さい。

【テーマ】「阪大待兼山キャンパスの歴史をたどる―浪高・阪大現地見学―」

【講師】廣川和花氏（大阪大学総合学術博物館助教、二〇〇二年卒（日本史学））

【日時】二〇一〇年五月八日（土）午後一時～三時四〇分

【集合場所】大阪大学総合学術博物館待兼山修学館三階セミナー室
（阪大下交差点東、旧医療技術短期大学部本館）

【スケジュール】

【第一部】解説と館内見学（午後一時～二時二〇分）於待兼山修学館

午後一時～一時四〇分

講演：廣川和花氏「近現代の待兼山と浪高・阪大」

（待兼山修学館三階セミナー室）

午後一時四〇分～二時二〇分

館内見学（解説：廣川和花氏）

【第二部】待兼山現地見学（午後二時二〇分～三時四〇分）

解説：廣川和花氏

浪速高等学校関係遺構、キャンパス生活ゆかりの建物（イ号館、ロ号館）と

場所のほか、大正天皇行幸碑なども訪れます。

※終了後、休憩・談話室として文学部本館二階大会議室を利用することができます。

お茶を用意していますので、懐かしい文学部本館で、ゆっくりお過ごし下さい。

◆「教育ゆめ基金」の報告◆

文学部創立六十周年（平成二十年）の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。平成二十一年度は文学部内の教職員に寄附を募り、三十万円のご寄附をいただきました。心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援いただきますようお願いいたします。

平成21年度「教育ゆめ基金」寄附者リスト（敬称略）

江川 温	工藤真由美	玉井 暉
大庭 幸男	高橋 照彦	藤田 治彦
岡田 禎之	高見 逸郎	森安 孝夫



◆「教育ゆめ基金」の支出（平成21年度）

エラスムス・ムンドゥス留学生への支援：288,000円
（平成22年1月18日現在の残額：2,196,900円）

◆「神林基金」（神林恒道名誉教授のご寄附）の支出（平成21年度）

「日本語超短期プログラム」開発人件費：170,624円

いつでも、お心のままにご寄附いただければ幸いです

（同封の「教育ゆめ基金」案内をご覧ください）

【待兼山俳句会へのお誘い】

待兼山俳句会は、大阪大学の卒業生とその家族が楽しんでいる句会です。毎月第三月曜日の午後二時より、大阪淀屋橋の大阪倶楽部に約二十名の会員が集い、和やかに句会をしています。第五日曜日のある月には、関西のあちこちに吟行に出かけています。昭和二十五年に戦後の学制改革により、大阪大学に編入された旧制浪速高等学校のOBが「浪高俳句教室」を発足させたのが始まりで、平成十二年待兼山俳句会と改称し門戸を大阪大学の卒業生とその家族に広げました。

会員総数は約三十名で、選者はホトギス同人の林直入氏(旧制浪高、東大農)と長山あや氏(阪大英文、昭34)です。どこの句会でも同じですが、選者を含めて全員で選句をします。互選の楽しみと同時に、選者による選句と指導を受ける喜びがあります。一人十句を出しますが、欠席の場合は五句となります。遠距離や勤務のため、投句だけの会員もおられます。会費はいずれも一回千円で、毎回会報が郵送されます。俳句はとりつきやすく、誰もが親しめる文芸ですが、なかなか奥が深く、みんな四苦八苦しながら楽しんでいます。

ご関心のある方はどうぞ一度見学においで下さい。

【問い合わせ先】〒593-8301 堺市西区上野芝町4-14-45

山戸暁子(昭34年卒 修士36年)

TEL 072-241-6977 E-mail svka10950@zeus.eonet.ne.jp

事務局便り

お知らせ

◆文学部創立五十周年記念写真集『大阪大学文学部50年の歩み』、『文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』(二〇〇七年版)販売中
一九九八年に大阪大学文学部創立五十周年を記念し製作された『大阪大学文学部50年の歩み』の残部(二百冊程度)を卒業生・修了生の皆様限り、販価(二〇〇〇円)十送料(一六〇円)で販売いたします。

また、二〇〇七年六月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』のご購入も随時承っております。こちらは販価(四〇〇〇円)十送料(一六〇円)でお送りいたします。ただし名簿



のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承下さい。なお、同窓会終身会費(一〇〇〇円)をお支払いいただいた方には一冊謹呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。

写真集、名簿のご購入を希望される方は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくご連絡下さい。

【写真集、名簿、終身会費のお支払い】

口座番号 094001179043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業・修了年、②専攻・専修名をご記入下さい。

●お願い

◆住所変更について

住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所・電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

◆事務局メンバー

事務局長：入江 幸男 (S五二)
総務：渋谷 勝己 (S六二)
会 計：西田有利子 (S五六)
企画・立案：和田 章男 (S五五)
三谷 研爾 (S五九)
本間 直樹 (H七)
広 報：服部 典之 (S五六)
事務局補佐：馬淵 恵里 (H十七)

◆なお、平成二年度より以下の体制に移ります。

事務局長：和田 章男 (S五五)
総務：入江 幸男 (S五一)
会 計：西田有利子 (S五六)
企 画：村田 路人 (S五二)
市 大樹 (H七)
広 報：三谷 研爾 (S五九)
事務局補佐：岡田 裕成 (S六一)
事務局補佐：宮川 真弥 (修1)
事務局補佐：松本ひとみ (H二〇)
(HPP担当)

●住所：〒500-0852 豊中市待兼山町一番五号

●ホームページアドレス：http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/

●事務局メールアドレス：dousoukai@let.osaka-u.ac.jp